よる「シーボルトの石物語」の二部構成で，頁数としては半々の割合だが，私は石物語の中の「シーボルトの鉱物図鑑」を別建てとして，三部より成ると言っておこう．前半では，大場氏のかねての主張であるシーボルト像の発展的見直しと，コレクションにまつわるオランダの国内事情や人物像，それに関連する重複標本の東大への分与の動きなどが，彼独特の口調で語られ，最後に日本へ里帰りしたシーボルト標本の中から 20 点について，標本のカラー写真と解説が各 2 頁，ときには 4 頁にわたって記されている．田賀井氏はもともと結晶学の研究者で，東大総合研究博物館へ移ってから鉱物標本の整理研究にたずさわるようになったとのことだが，たまたまシーボルト植物標本の分与を機に、その鉱物標本の調査整理に引き込まれたのだそうだ．これも大場氏の巧みな誘導によるものらしい．鉱物の産地は，樺太から琉球にまでおよんでいるとのこと．鉱物図鑑では，「日本鉱物誌への第一歩」という副題で，32 種類におよぶ鉱物，岩石などが，豊富なカラー写真で示され，ラベルの記事についての検討結果が記されている．珪化木は 93 点もあり，現在でも第一級のコレクションだそうだ．Flora や Fauna に相当するラテン語が見つからないという．シーボルト研究はまだ終わりそうにないどころか，新たな展開が見込まれる．（金井弘夫）

□菱山忠三郎：**身近な樹木** 18×23.5 cm. 367 pp. 2010. ¥1,600+ 税．主婦の友社．ISBN 978-4-07-270521-6 C2077.

同じ著者の野草・雑草編が出たとき,「いずれ樹木についても期待される」と書いたが，その紹介文が出た頃には本書が出版されていた．今回の配列は場所別で，町なか，野原・里山，海岸，山地である．園芸植物はすべて町なかの部類に含まれる．写真はせいぜいルーペレベルの拡大なので，一応ながめておけば，実物に行き当たったときに「こんなものが見えるはずだ」と観察を深めることができるだろう．実物を見て「図鑑と同じだ」と認識することは悪いことではない．見ていれば図鑑と違うところがたくさんあるのだから．前著と共に手元に置くとよい．(金井弘夫)

□大場秀章・日本植物画倶楽部：**日本の帰化植物図譜** A4. 330pp. 2009. ¥9,333+ 税．ISBN 978-4-900358-65-2 C0045 アボック社

帰化植物 200 種類の全形および部分の原色画が一頁ずつ示され，続いて「解説」として同じ画の縮小白黒版を一頁に二点ずつ示し，和文と英文で簡単に性状，生育地，渡来時期などを記すと共に，制作者のメモや採集地の状況などの記事がある．作画者にはその標本を作ることを義務づけ，茨城県自然博物館で同定して保存してあり，その標本番号が付記されている．また原画に植物学的な誤りがないよう，大場氏がチェックしたとのこと．同博物館小幡和男氏の「帰化植物図と押し葉標本」の一文がある．最後に押し葉標本番号一覧として，標本ラベルのデータが示され，原画の作者のクレジットが表示されている．植物画家と博物館の連携の一つの望ましい行き方と思う．他の機会にも言ったことがあるが,原画には縮尺を示す「×0.68」のような表示が付いていて，望ましい配慮だと思うが，これはむしろスケールバーの方が有用だろう．この表示では「解説」頁のように画のサイズが変わったときに，無用というより誤解を招くことになりかねないからである．（金井弘夫）

□ Wu Z.G, Raven P.H. and Hong D.Y.: **Flora of China vol. 10. *Fabaceae*** 642 pp. 2010. Science Press (Beijing) and Missouri Botanical Garden Press (St. Louis). ISBN 978-7-03-026258-5/Q・2401, ISBN978-1-930723-91-7 (v.10).

Flora of China 第 10 巻マメ科が出版された．中国のマメ科植物は日本人にとっては中国植物志によって分かっていたことであったが，漢字の読めない人には未知の事柄であった．本書の出版によって英文で初めてその全体像が知られることになり，植物学上の大きな貢献となった．この成果は Flora of China 計画を通して中国植物全体についていえるものである．Flora of China は全 24 巻の計画で，1994 年に第 17 巻「クマツヅラ科からナス科」の出版に始まり，この第 10 巻で全 18 巻が出版された．これまでの出版によって 23,595 種の記載が終わり，中国の維管束植物の総数全体を約 31,500 種と見て，75% の記載が終わったという．この計画と共に Flora of China Illustrations も進められており，両者相まって植物分類学の偉大な成果が完成しつつある．両者の完結が楽しみである．

第 10 巻についてみると，学名が正され，key が整備され，記載が統一されるなど，中国植物志のマメ科が著しく改訂され，最新の形式が整え